



組作「輪廻転生」(永遠生命・俱會一処・如蓮華在水・無量壽佛) 300cm × 300cm

篆刻とは数センチ四方の石印材の面に古代文字を刻む芸術。

しかし、師村妙石のザ・テンコクは、まったく違う。

大きな作品は1メートルを超えるほど巨大で、印泥の色も

朱色だけでなく青や黄、紫、緑と多彩な色を用いる。

刻まれたものは文字か伝統的文様か、はたまたポップアートか。

自己の作品を「進化した篆刻」と呼ぶ師村妙石。研鑽と創造の

賜であるその作品は、篆刻の故郷・中国で大きく評価されている。



2008年1月オリンピックシリーズを制作中のアトリエにて

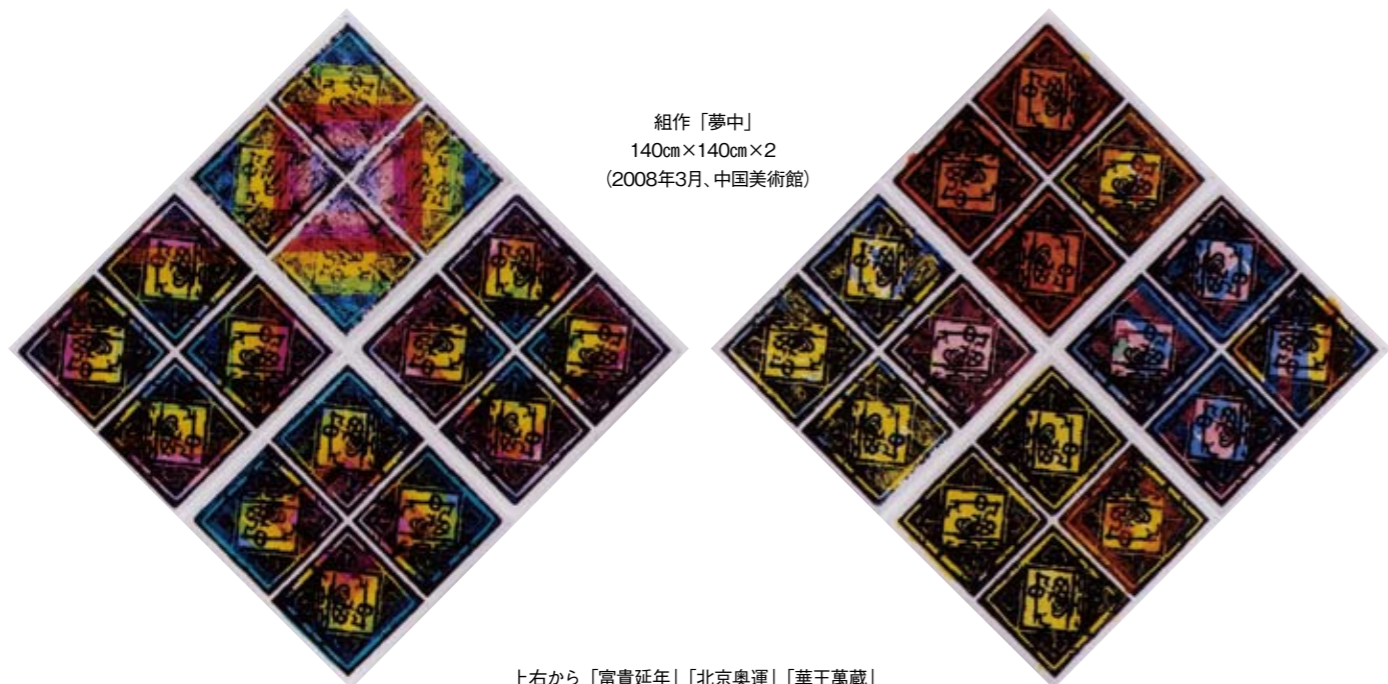


インスタレーション「桜花爛漫」

中国が生んだ方寸の芸術・篆刻に革新の旋風を巻き起こす

つ・く・る
「べたーらいふ」の
達人たち

師村妙石の世界



組作「夢中」
140cm×140cm×2
(2008年3月、中国美術館)

上右から「富貴延年」「北京奧運」「華王萬歲」
下右から「同一個世界」「同一個夢想」
(2008年3月、中国美術館)



中国加油展にて中国を代表する映画俳優・張鐵林氏と



中国加油展 (2008年8月、北京飄飄人画廊)

中国加油展 (2008年8月北京飄飄人画廊) 加油黄紅シリーズ



ゴッホの衝撃

日本最大の美術展・日展の審査員を務める師村妙石は、日本を代表する篆刻家の一人である。中国・清朝末期の文人・呉昌碩を師と仰ぐ妙石は、呉昌碩の重厚でエネルギーッシュ、かつ鋭利で勁い作品に大きな影響を受けつつ、篆刻の世界で自己の表現を確立してきた。しかし、同時に篆刻の世界の限界をも感じ始めていた。そんな妙石に転機が訪れたのは2000年3月に出会ったゴッホの絵を見たときだった。

「どの作品も素晴らしかったが、とりわけ『公園の若草』と題された作品の前で私は釘付けになった。それは樹木の幹と草花の絵だった。公園が庭の片隅のどこにでもある風景だったが、何かが私の心をつかんで離さなかった。それが何かわからないまま、後ろ髪を引かれる思いで展覧会場を後にした。購入した図録の絵をアトリエでにらみ、深夜まで悶々と過ごした」

その理由がわかるのは、ゴッホの図録をモノクロで拡大コピーしたときだという。

「私はゴッホの憑かれたような激しい、それでいて計算し尽くされたような緻密な筆致が、呉昌碩のそれとまったく同じであることに気付いた」

師村妙石は二人の激しい筆づかい、すなわち魂の激しさをそのまま書き付けたような筆致を篆刻に表現できたらと考えた。しかし、そのためには作品は方寸の大きさではすまない。篆刻で彫れる石の大きさには限度があるので、押印した印影を拡大して刷り直し、色彩も多様にするにしようとしたという。

温故創新

また、驚くべきは伝統を重んじつつも新たなテクノロジーも導入する。温故創新ともいふべき姿勢だ。

「最初はコンピューター・グラフィックスでの表現を試みた。作品をデジタル化し、さまざまに色や大きさを変換してみた。が、どれも平板だった。デジタル化の過程で肝心の刀の勢いが殺されてしまうのだ。次にアナログ式の印刷機をいくつも試した。市販の機器では満足できず、あるメーカーの孔版印刷機の試作品に行き着いた。インクを絞り出す網目の孔が超微細で、拡大しても刀で彫った筆致の勢いと鋭利さを生かし続け、印泥で押した重厚感を再現することができる。製版や印刷については一から勉強し、満足のいく作品を制作するまで一年ほど要した」

デジタルの落とし穴を、芸術家の目見のがさなかった。驚くべきは、自己の作品を再現するために妥協をしないその姿である。

つ・く・る
「べたーいふ」の
達人たち

師村妙石
の世界



師村妙石作「加油」Tシャツを宮本雄二在中国日本国大使に贈る(2008年9月)



上海市「白玉蘭紀念獎」授賞式(2008年9月18日)



ニューヨーク展(2006年4月)



2007年世界書芸全北ビエンナーレグランプリ受賞作
「輪廻転生夢中曼荼羅」



Profile
師村妙石

1949年宮崎県生まれ。福岡教育大学特設書道科卒業。現在日展審査員・会員、読売書法会常任理事、全国図書美術振興会参事、全日本篆刻連盟常任理事、福岡県美術協会理事・書部会委員長、西冷印社名誉社員、上海中国画院名誉画師、上海吳昌碩芸術研究協会名誉理事、上海吳昌碩紀念館顧問、大連市書法家協会名誉顧問、大連市書道芸術発展中心芸術顧問、安吉県人民政府経済文化発展顧問。日展特選2回、第一回福岡県文化賞、宮崎県文化賞、北九州市民文化賞、2007世界書芸全北ビエンナーレ・グランプリなどを受賞。おもな編著書に『篆刻字典』『古典文字字典』『続古典文字字典』などがある。

新たな挑戦

表現の変化とともに、彫り方も変化したという。産みの苦しみに続く、創造し続けることの試練でもある。

「本来、篆刻は精密作業。机に座り、鉛筆を握るように印刀を持つ。だが、私は仁王立ちで印刀をわしづかみにし、気合いもろとも石に挑みかかる。より強く、より鋭くえぐり出す。筋力と体力が必要だ。彫り上げると全身汗まみれ。強烈な脱力感に見舞われる。あと何年、こんな彫り方を続けられるか、自分でもわからない」

しかし、師村妙石は立体的作品の制作への新たな挑戦など、芸術に生き続ける。



「雙虎」



インスタレーション「駆けぬけたヒラク」(2007年1月、福岡アジア美術館)



インスタレーション「黄砂萬里・緑化大地」(2008年3月、中国美術館)



「群龍」

以後、東京や福岡などでも個展を開く。

「伝統的な篆刻の歴史の中で見れば、私の表現に違和感を覚える人もいるかもしれない。しかし、吳昌碩が現代に生きていけば、私の表現や姿勢を理解してくれるのではないかと自負している。」

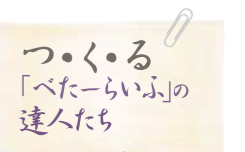
そして、この自負が現実のものとなる。篆刻の故郷・中国で彼の作品は大きな反響を呼んだのだ。2004年4月2日〜4日ついに上海美術館で同展が開かれた。個展に訪れた上海東方美術学校・于長寿校長は「作

品には多くの創新がある。中国の篆刻も影響を受けることになるかもしれない」とまで言わせたのである。同年8月には大連白雲美術館で開催。

2008年3月12日〜17日には中国を代表する北京市国立中国美術館で『師村妙石 創新篆刻回報展』が開かれ、世界的に著名な美術評論家・范迪安館長から高く評価され、作品2点が館に収蔵されることとなった。師村の「ザ・テンコク」に五日半で、なんと2万8千人の観覧者が訪れたのだ。

昨年、2007世界書芸全北ビエンナーレではザ・テンコク「輪廻転生夢中曼荼羅」作品がグランプリに輝き、伝統ある書芸の世界に衝撃を与えたのである。

ザ・テンコク
進化した篆刻が故郷に帰る



師村妙石
の世界